

---

地域連携報告書

---

佐渡の高校生および若手在住者に対する佐渡定住に関するワークショップと意識調査報告Ⅱ  
- SDGs 定住プログラムと情報拡散 -

a report of awareness research and workshops of life and settlements on high school  
students and local residents in Sado Island Ⅱ

-SaDoGashima's Settlement Program and Information Dissemination -

藤田晴啓\*\* 児玉美海\* 尾仲峻頌† 阿部良紀\* 今井玲志\* 樋口祥大\* 佐藤未奈\*

Fujita Haruhiro, Kodama Miyu, Onaka Takanobu, Abe Yoshiki, Imai Ryoji, Higuchi Sota,  
and Sato Mina

概要

新潟国際情報大学藤田晴啓ゼミナールは2022年9月、佐渡市羽茂小泊集落および新潟県立佐渡総合高校にて佐渡定住ワークショップおよびアンケート調査を実施し、2021年に佐渡市が同様の調査を行った結果と比較検証した。佐渡市アンケート結果では84.6%の学生が島外に進学・就職する結果であった一方、佐渡総合高校3年生21名のアンケート調査では88.9%の学生が島外に進学・就職する結果となり、ほぼ数値的には近いものとなった。佐渡総合高校3年生21名が佐渡に住み続ける(島外進学・就職のあと)希望は72.2%であった。一方佐渡市の高校生アンケート調査では「未定だがいずれ佐渡に戻ってきたい」を含めると66.5%が佐渡定住を希望しており、若干数値が低くなっている。佐渡市のアンケートで個々の行政サービスに対する満足度調査では、「満足」および「やや満足」のポイントを合計した満足度が一番高かったものは「自然環境・エコ・エネルギー」であり、次に「防災・防犯」であった。この結果は、藤田晴啓ゼミナール調査での佐渡の「住みやすい要因」として「緑や水辺など自然・町のイメージ」の選択が最も多く、次に「治安」と選択された結果と一致した。

佐渡総合高校でのアンケートでは「住みにくい原因」として「通勤通学の利便性」について「バスや公共交通機関の充実度」が指摘されており、佐渡市が実施した高校生アンケートの行政サービスに対する自由意見では「公共交通」が31%を占めており、公共交通の是正に強い要望があることが明らかとなった。

佐渡総合高校でのワークショップでは「10歳代若者の佐渡から流出の原因とその解決策」といったかなり具体的な課題設定としたため、佐渡市主催の高校生ワークショップで報告されたような場当たりの提案や意見は少なかった。課題解決策として「公共交通機関の充実」「進学・就職先の充実」「娯楽施設の充実」の3点がまとめられた。

小泊集落でのワークショップでは、「佐渡での住みやすい環境整備」をテーマに話し合いを進めた。3つのグループで共通して出た意見として、「移動手段の充実」、「子育て支援の充実」、「学校の増設」、「給料に合った物価」などがあげられた。小泊集落でのワークショップ参加者の中には、実際に佐渡での子育ての経験がある住民もいたため、過去に子育てをして何が不便だったか、どんな制度があったら良かったか、というような意見が積極的にあげられた。

---

\* fujita@nuis.ac.jp \*\*新潟国際情報大学経営情報学部経営学科 †新潟県立佐渡総合高校

藤田晴啓ゼミナールは二つのワークショップを運営したことで、これからの将来を島内で過ごすかどうか考える若者、既に島内で生活をしていてどうすればより良い生活が送れるかを考える親世代の方の両方からそれぞれの視点に合わせた意見を聞くことができ、今後の活動の指針とすることができた。

**キーワード:**佐渡市総合計画にかかわる調査 人口流出 高校生進学・進路 住みやすさ 定住

## 1 背景と今回の調査

新潟国際情報大学藤田晴啓ゼミナールは2020年および2021年に実施した佐渡定住に関するワークショップ1)2)に続き、2022年9月16日および9月17日に佐渡総合高校2・3生および羽茂小泊集落にて島内若手在住者とのワークショップを実施した。佐渡総合高校では併せて高校生の佐渡定住に関する意識調査をアンケートにより実施した。一方、佐渡市は2021年1月から同年5月までに佐渡市総合計画策定の根拠とするため、佐渡市民の生活や利便性、行政サービスに関するアンケート調査およびワークショップを実施し、その結果をWebページで公開した3)。本稿ではまず佐渡市の総合計画に関わるアンケート調査のレビューを行う。この調査には佐渡市内高校2年生を中心とした卒業後の進路・就職に関するアンケートの含まれ、その概要をレビューした後に新潟国際情報大学藤田晴啓ゼミナールが2022年9月16日に佐渡総合高校3年生に実施した同様の質問からなるアンケート調査結果を報告する。引き続き佐渡市が実施した高校生を対象としたワークショップのレビューと、藤田晴啓ゼミナール生が実施した佐渡総合高校でのワークショップの概要を報告する。最後に佐渡市が実施した子育て世代ワークショップのレビューに続いて羽茂小泊集落でのワークショップの結果を報告する。

## 2 佐渡市総合計画に関するアンケート調査のレビュー

佐渡市は、2021年に策定した「佐渡市将来ビジョン」の計画期間が終了したことに伴い、新たなまちづくりの指針となる「佐渡市総合計画」を策定することを目的として、2021年1月から2月にかけて1)市民アンケート、2)事業所アンケート、3)子育て世代アンケート、4)高校生アンケート、さらには5)子育て世代ワークショップそして6)高校生ワークショップと大規模な市民生活に関する意識調査を実施した。その結果は佐渡市のWebページにて公開されている3)。この調査は前述のように藤田晴啓ゼミナールが2020年から2022年に実施したアンケートおよびワークショップと内容が類似のものであり、佐渡市による広範囲で多くの回答者による重要な情報を含んでいるので、本稿では「事業所アンケート調査」以外の結果のまとめ、いわゆるレビューを実施した。

### 2-1 佐渡市市民アンケートレビュー

佐渡市は無作為に抽出された18歳以上の佐渡市民3,000人に対し、2021年1月15日から2月4日まで郵送による配布・回収により、佐渡市の住み心地や住み続ける意向、市内交通機関状況への意識、仕事、結婚・出産・子育てに関する質問、高齢者や障害者が安心して暮らすことへの支援、市内の教育環境等への質問等、広範囲の行政サービスに関わるアンケート調査を実施し、54.4% 1,631人から回答が得られた4)。

佐渡市の住み心地について、約70%の方が住みやすいと考えており、今後の居留意向では約78%の方が佐渡市に住み続けたいと回答した。今後も佐渡市に住み続けたいと回答した市民の半数以上が、「自分または家族の家や土地があるから」を理由としていた。市外へ移りたいと回答した理

由として、「医療・福祉体制が不十分だから」が約 40%で最も多く、次いで「人間関係がわずらわしいから」が約 36%だった。

日常生活でバスまたはタクシーを利用する機会について、約 18%の市民が最低でも数か月に 1 回以上はバスまたはタクシーを利用していた。公共交通の改善に必要なこととして、回答者の約半数が「交通が不便な地域のバス運行」と回答した。

より多くの移住者を受け入れるために必要なこととして、「仕事情報の発信や仲介・斡旋」が約 30%で最も多く、次いで「地域の受け入れ体制の構築」が約 16%であった。

若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえるために必要なこととして、「保育費や教育費等の子育てに関する経済的支援」が約 29%で最も多く、次いで「出会いの場の創出や婚活セミナーの開催」が約 25%であった。

一方、高齢者や障がい者が安心して暮らし続けていくために必要なこととして、「移動販売や配達などの買い物支援の充実」が約 29%で最も多く、次いで「地域医療や福祉サービスの充実」が約 26%であった。

## 2-2 佐渡市子育て世代アンケートレビュー

佐渡市は、市内の小学校、幼稚園、保育園を利用している 3,347 名の保護者に 2021 年 1 月 6 日から 2 月 1 日まで、案内書を配布し、Web で回答する子育てに関するアンケート調査が実施され、5.8%の 194 名の保護者から回答がよせられた<sup>5)</sup>。

子育てを協力してくれる家族や知人について、約 12%の保護者が「身近に協力してくれる人はいない」と回答した。現在の家事と育児の役割分担について、半数以上が「自分が主で、配偶者が一部担う」、「自分が大半を担う」と回答した。一方で、理想とする役割分担については、約 67%が「自分と配偶者が同程度担う」と回答している。

理想とする役割分担を男女別でみると、「自分が大半を担う」と「自分が主で配偶者が一部担う」は、男性が約 2%であるのに対し、女性は約 32%であった。また、「配偶者が大半を担う」と「配偶者が主で自分が一部担う」は、女性が約 1%であるのに対し、男性は約 23%であった。

日頃から子育てに関して悩んでいることや不安に思っていることとして、「子どもの発育・発達・性格行動など子ども自身のこと」が最も多く（約 51%）、次いで「子育てにかかる経済的負担に関すること」であった（約 50%）。

第一子の年齢別でみると、第一子が 3~5 歳、9~11 歳である保護者は、「子育てにかかる経済的負担に関すること」について悩んでいる割合が多い結果となった。また、第一子が 0~2 歳である保護者は、「保育等の子育てサービスの条件が合わず、利用できないこと」が、他の意見と比べて高い割合となった。

子育て支援のための取り組みのうち、「延長保育や病後児保育の保育サービス」の満足度が約 50%で最も高かった。一方、「公園や児童館などの遊びの場」については、約 63%の保護者が不満を感じており、今後の重要度については、「公園や児童館などの遊びの場」の必要性が約 92%で最も高く、次いで「学童保育等の小学生が放課後過ごせる場」が約 88%であった。特に「公園や児童館などの遊びの場」は、現状の満足度が低く、今後の改善の必要性が高いことは明らかとなった。

保護者の要望を第一子の年齢別で分類すると、第一子が 3 歳以上である保護者は「延長保育や病後児保育の保育サービス」、第一子が 0~2 歳である保護者は「子育てセミナーや講座等」が、それぞれ満足度が高い一方で、第一子が 3~5 歳である保護者は、「公園や児童館などの遊びの場」

に次いで、「子育てに関する情報発信」についても半数以上の保護者が不満を感じていた。

今後の改善の必要性が80%を超える取り組みは、共通して「公園や児童館などの遊びの場」と「学童保育等の小学生が放課後過ごせる場」が高く、第一子が0～2歳である保護者は「延長保育や病後児保育の保育サービス」、第一子が0～2、6～8歳である保護者は「子育てに関する情報発信」と「子育てに関する相談窓口」がそれぞれ高かった。

市内での教育環境について不安に思っていることや心配していることとして、「学校の児童・生徒数が少なく、行事や部活動等が限られる(約25%)」が最も多く、次いで「大学がなく、進学のために市外へ転出しなければならない(約19%)」であった。地域別でみると、両津地区は「進学のために市外へ転出しなければならない」、相川地区と国中地区は「多様な意見に触れる機会がない」、南佐渡地区は「行事や部活動が限られる」が、それぞれ他の意見と比べて高い。第一子の年齢別でみると、第一子が3～5歳の保護者は「多様な意見に触れる機会がない」、第一子が12歳以上の保護者は「行事や部活動が限られる」が、それぞれ他の意見と比べて高い傾向がみられた。

子育て環境や子育て支援について、92名の子育て世代の保護者から意見が述べられた。最も意見が多かった項目は、約41%の「子どもの居場所づくりやコミュニティづくり」といった「周辺環境」、次いで、約27%の方が情報提供やサポート体制といった「子育て支援」に関する意見を述べていた。

### 2-3 佐渡市子育て世代アンケート(再調査)レビュー

佐渡市は、初回の子育て世代アンケート調査では対象となる保護者の5.8%しか回答がなかったため、あらたに2,757名の市内の小学校、幼稚園、保育園を利用している保護者を対象に再調査を実施したところ、全体の74.3% 2,048名の保護者から回答が寄せられた<sup>6)</sup>。

「子育てを協力してくれる家族や知人」について、約8%の保護者が「身近に協力してくれる人はいない」と回答している。

「現在の家事と育児の役割分担」については、「自分が大半を担う(約29%)」と「自分が主で、配偶者が一部担う(約34%)」で半数以上を占めている一方で、「理想とする役割分担」については、約66%の保護者が「自分と配偶者が同程度担う」と回答した。「理想とする役割分担」を男女別でみると、「自分が大半を担う」と「自分が主で配偶者が一部担う」の合計は、男性が約7%であるのに対し、女性は約29%であった。また、「配偶者が大半を担う」と「配偶者が主で自分が一部担う」は、女性が約1%であるのに対し、男性は約18%であった。

「日頃から子育てに関して悩んでいることや不安に思っていること」として、「子育てにかかる経済的負担に関すること(約49%)」が最も多く、次いで「子どもの発育・発達・性格行動など子ども自身のこと(約45%)」であった。第一子の年齢別でみると、第一子が0～2歳である保護者は「自分や夫婦の時間が十分に取れないこと」、3～8歳である保護者は「子どもの発育・発達・性格行動など子ども自身のこと」、9歳以上である保護者は「友達付き合いに関すること」について悩んでいる保護者が他の意見と比べて多い結果となった。

「子育て支援のための取り組みの満足度」では、「延長保育や病後児保育の保育サービス」の満足度が約50%で最も高い一方で、「公園や児童館などの遊びの場」については、約56%の方が不満を感じていた。今後の改善施策については、「公園や児童館などの遊びの場」の施策が約90%で最も高く、次いで「学童保育等の小学生が放課後過ごせる場」の施策が約84%であった。特に「公園や児童館などの遊びの場」は、現状の満足度が低く、今後の改善への要望が高いことが明らかとなった。

第一子の年齢別でみると、共通して「延長保育や病後児保育の保育サービス」の満足度が高く、第一子が6歳以上である保護者は「小学生が放課後過ごせる場」の満足度が比較的高い一方で、第一子が3～5歳である保護者は、「公園や児童館などの遊びの場」に次いで、「子育てに関する情報発信」に対して、半数以上の保護者が不満を感じていた。今後の改善要望が80%を超える取り組みは、共通して「公園や児童館などの遊びの場」と「学童保育等の小学生が放課後過ごせる場」であった。また、第一子が0～8歳である保護者は「延長保育や病後児保育の保育サービス」の改善要望も高い結果となった。

「市内での教育環境について不安に思っていることや心配していること」では、「学校の児童・生徒数が少なく、行事や部活動等が限られる（約29%）」が最も多く、次いで「大学がなく、進学のために市外へ移転しなければならない（約19%）」であった。地域別でみると、両津地区と南佐渡地区で「統廃合により通学に時間がかかる」、相川地区で「多様な意見に触れる機会がない」が、高かった。第一子の年齢別でみると、特に第一子が12歳以上の保護者で「行事や部活動が限られる」という意見が多かった。

「子育て環境や子育て支援」について、514名の子育て世代の保護者から要望が挙げられた。最も意見が多かった項目は、「子どもの居場所づくりやコミュニティづくり」といった「周辺環境」で、約39%の方が要望を挙げている。次いで、経済的支援や情報提供といった「子育て支援」に対して約24%の方が要望を挙げている。

## 2-4 佐渡市高校生アンケートレビュー

佐渡市は、2021年1月18日から1月25日にかけて、市内の高等学校に通う高校2年生等373名に卒業後の進路、進学や就職に関するアンケート調査の案内チラシを配布し、回答はウェブまたは回答用紙で行い、92%の343名から回答があった<sup>7)</sup>。

その結果、卒業後に希望する進路について、大学等への進学を希望している高校生は約46%、専門学校等への進学を希望している高校生が約28%であり、合計で約74%の高校生が大学あるいは専門学校への進学を希望していた。

希望している進学・就職等の地域について、佐渡市内での進学・就職を希望している高校生は約13%であった。一方、佐渡市以外での新潟県内での進学・就職を希望する生徒は約55%、首都圏は約16%であり、佐渡市内での進学・就職希望は選択肢の中では最小であった。佐渡市での進学・就職を希望する生徒の理由として、「実家から通えるから」が約49%で最も多かった。佐渡市外での進学・就職等を希望する生徒の理由として、「佐渡市に希望する進学先・就職先がないから」が約64%で最も多かった。

佐渡市外での進学・就職等を希望している高校生のうち、約67%が将来的に佐渡市に戻ってきたいと考えていた。そのうち、就職や結婚等のタイミングで戻ってきたいと考えている高校生は約24%であり、時期は未定だがいずれは戻ってきたいと考えている高校生は約42%であった。将来的に佐渡市に戻ってきたいと回答した理由として、「実家があるから」が約48%で最も多く、次いで「家族や友人がいるから」が約39%であった。

佐渡市の取り組みのうち、「自然環境やエコ、エネルギー等」の満足度が約55%で最も高く、次いで「防災・防犯等の安心安全」が約52%であった。一方で、「道路やバス、公園等の生活環境」については、約46%の高校生が不満を感じていた。また、今後の改善策については、「道路やバス、公園等の生活環境」の改善策が約80%で最も高い結果となった。特に「道路やバス、公園等の生活



写真1 佐渡総合高校ワークショップ-1



写真2 佐渡総合高校ワークショップ-2

環境」は、現状の満足度が低く、今後の改善要望が高かった。

佐渡市の将来やまちづくりについて、36名の高校生から要望が挙げられた。最も要望が多かった項目は「公共交通」で、約31%の高校生が要望として挙げていた。次いで、約13%が「娯楽施設」に関する要望を述べていた。

### 3 佐渡総合高校生追跡アンケート調査

2022年9月16日、新潟県立佐渡総合高校ビジネス情報系列3年生20名との佐渡定住ワークショップ開催直後に、質問票形式で高校卒業後の進路希望や佐渡の生活利便性に関する調査を実施した。同ビジネス情報系列3年生には1年前の2021年9月4日の2年次に同じアンケート調査を実施しており、ここでは追跡調査による2年次および3年次の変化を報告したい。

#### 3-1 佐渡総合高校生追跡アンケート調査(進路・就職)

情報ビジネス系列2年次では20名のうち、島内進学希望者は1名、島外進学希望者は15名、島内就職希望者は3名、そして島外就職希望者は1名であった(図1)。情報ビジネス系列3年次では21名とクラス人数が1名増え、島内進学1名、島外進学15名、島外就職2名であり、島内就職希望者は3名、そして島外就職希望者は1名であった(図2)。グラフ表示だと島外進学希望の割合が減ったように表面上見えるが、いずれも15名で同じ。母数が1名増えたので割合的には弱減しているが、3年次に1名追加の学生が島外就職を希望したとすれば、このクラスの進学および就職に対する希望は全く変化しないと考えられる。

図1および図2で示した進路希望者のうち島外進学を希望した生徒の卒業後の島内外就職希望を図3および図4にそれぞれ示した。2年次の島外進学希望者15名のうち4名は卒業後は島内就職希望、10名は島外就職希望、1名は無記入であった。それが3年次になると、島外進学希望者15名のうち2名は島内就職希望、13名は島外就職希望となった。母数が変化していないので15名は同じ生徒である可能性は高い。島外に進学希望する高校生では2年次から3年次にかけて島内就職希望者が2名減り、おそらく無記入だった生徒もふくめ島外就職希望3名増える結果となった。

進学後の就職希望を含めた最終的な就職希望を図5および図6に示した。2年次には40% 8名の生徒が島内での就職を希望する一方、55% 11名の生徒が島外での就職を希望した。一方3年次には23.8%の生徒5名が島内での就職を希望し、76.2%の生徒16名が島外での就職を希望するこ

とから、一年間で生徒の就職意識は島外就職を希望する生徒の割合が増えたことが明らかとなった。

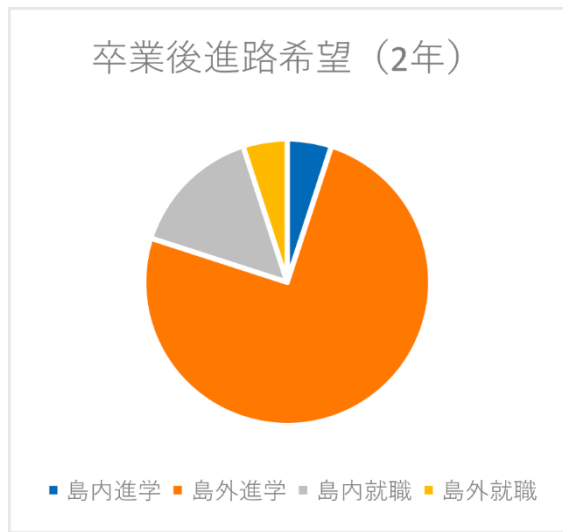


図1 情報ビジネス系列2年生の進路希望

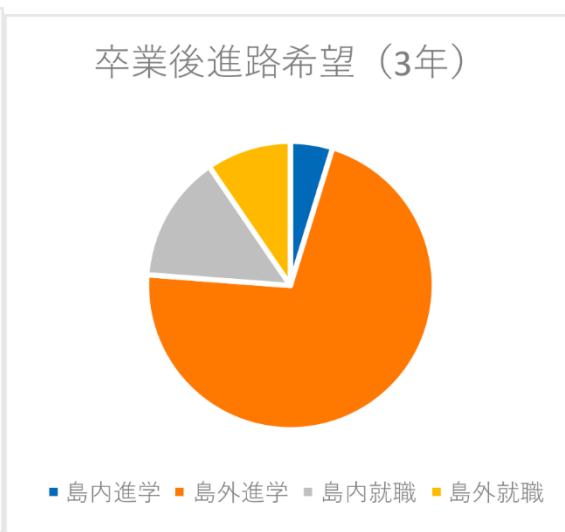


図2 情報ビジネス系列3年生の進路希望

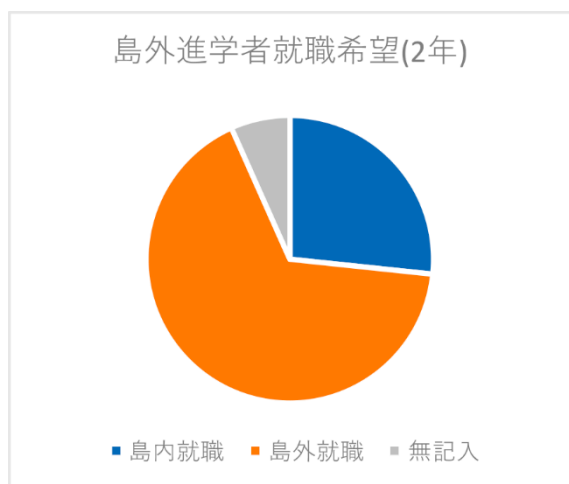


図3 島外進学後の就職希望 (2年次)

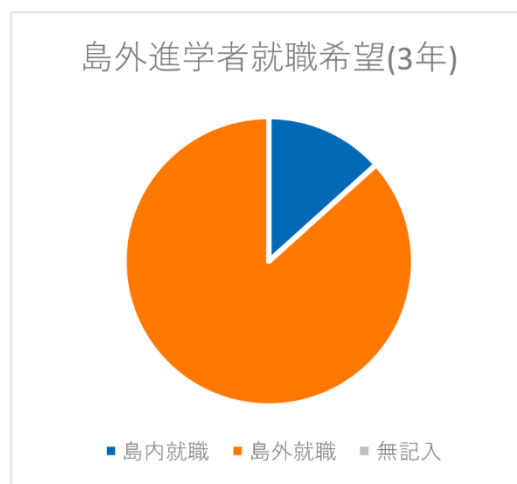


図4 島外進学後の就職希望 (3年次)

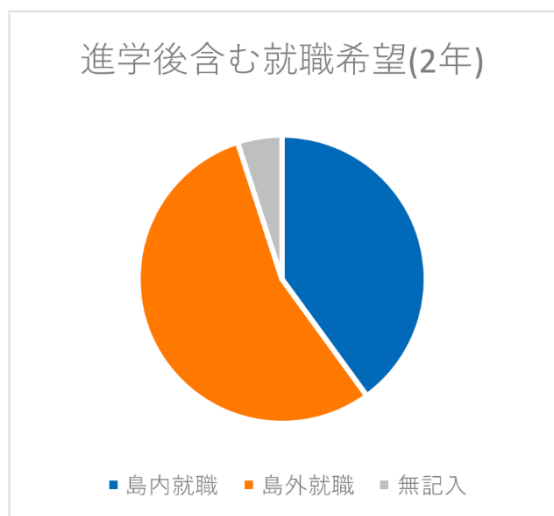


図5 進学希望者含む最終就職希望 (2年次)

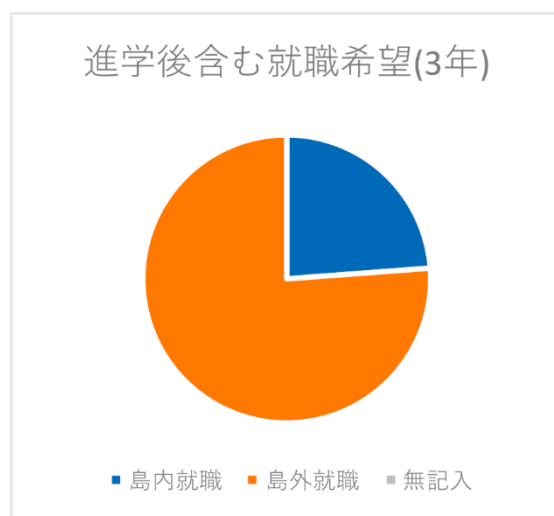


図6 進学希望者含む最終就職希望 (3年次)

### 3-2 佐渡総合高校生追跡アンケート調査(住みやすさ)

住みやすさの感じ方では2年次の20名中15名(75%)が住みやすいと感じ(図7)、5名(25%)が住みにくいと感じた。一方3年次では21名中16名が住みやすいと感じ、4名が住みにくいと感じており、1名は無記入であった(図8)。基本的に住みやすさへの意識に変化は見られなかった。

2年次および3年次に「住みやすいと考える要因」を選択した結果を図9および図10にそれぞれ示した。基本的に全ての項目での選択度の順位に変化はなく「緑や水辺など自然・町のイメージ」、「治安」は2名ずつ増加、「近所付き合い」は3名増加した。「物価」は5名から2名に減少した。「病院などの医療体制の充実度」および「教育環境の充実度」はそれぞれ2名から1名ずつに減少した。「その他」および「買い物など日常生活の利便性」は変化がなかった。

2年次および3年次が「住みにくいと考える要因」を図11および図12に示した。全体的に1年間で住みにくい要因をあげる頻度が増加している傾向がみられた。2年次では「バスなどの公共交通機関の充実」が一番選択度数が多く、その次に「買い物など日常生活の利便性」が住みにくい要因と認識していた。3年次では「通勤通学の利便性」が2名から13名に一気に増加し、その次に「買い物など日常生活の利便性」が2名から9名と住みにくい要因と考える生徒が増加した。

「バスなどの公共交通機関の充実度」も4名から7名へと増加している。「物価」は1名から5名へと大幅に増加した。「道路などの都市基盤の充実度」は1名から2名に、「近所づきあい」は変化なし、「教育環境の充実度」は1名から3名に住みにくさの要因として増加した。さらに2年次には選択されなかった「緑や水辺など自然・街のイメージ」「病院などの医療体制の充実度」「治安」も住みにくさの要因として選択された。

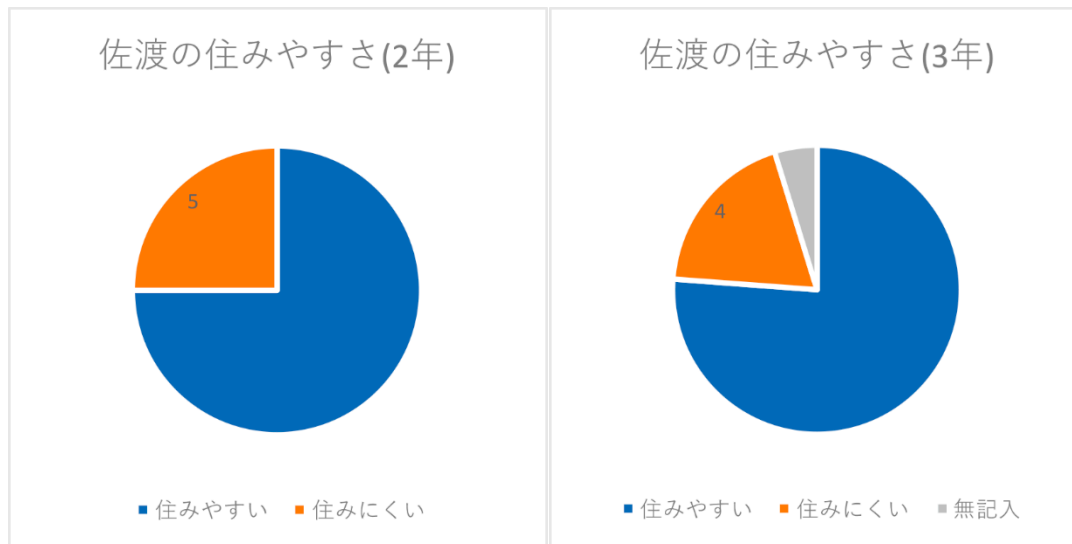


図7 佐渡の住みやすさ (2年次)

図8 佐渡の住みやすさ (3年次)



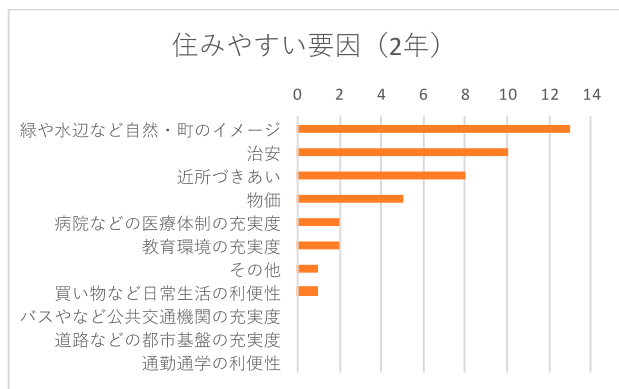


図9 住みやすいと考える要因 (2年次)

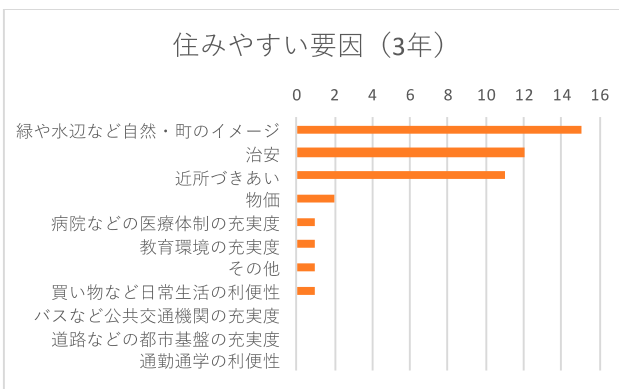


図10 住みやすいと考える要因 (3年次)

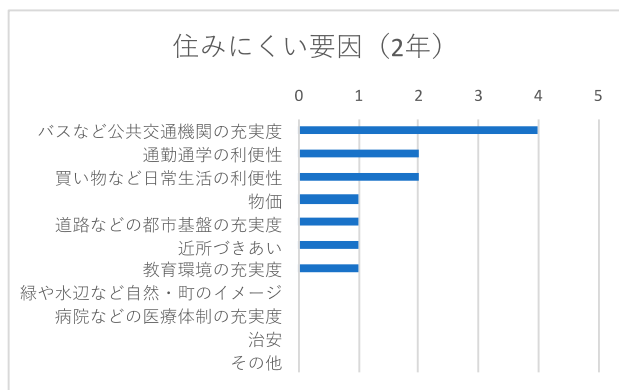


図11 住みにくいと考える要因 (2年次)

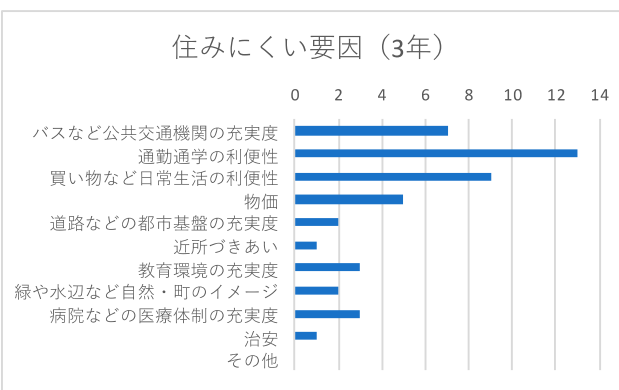


図12 住みにくいと考える要因 (3年次)

### 3-3 佐渡総合高校生追跡アンケート調査(定住)

「佐渡に住み続ける希望」では、2年次および3年次では全く変化はなかった。2年次では20名中の65%(13名)が住み続けることを希望し、3年次には同じく13名が住み続ける考えを表した。3年次に1名増加した生徒は住み続けたくないを選択したものと考えられる。生徒が考える「地元に残る人を増やす方策として必要なもの」を図15および図16にそれぞれ示した。

2年次および3年次では全体の傾向に大きな変化は見られない。一番頻度の大きかった項目は「専門学校の増設」で頻度もほぼ同じとなった。「娯楽施設の増設」は3年次に2名選択がすくなくなかった。「大学」は2年次、3年次とも12名と同数であった。「島内における交通の利便性」は2年次には12名が選択していたが、3年次に選択する生徒は8名に減少した。「多種多様な勤め先」は2年次の8名から3年次は10名に増え、就職環境への関心が若干上昇したことを示唆している。「本土との交通の利便性」は若干増えているが、「おしゃれな住宅等」とほぼ変化はみられなかった。

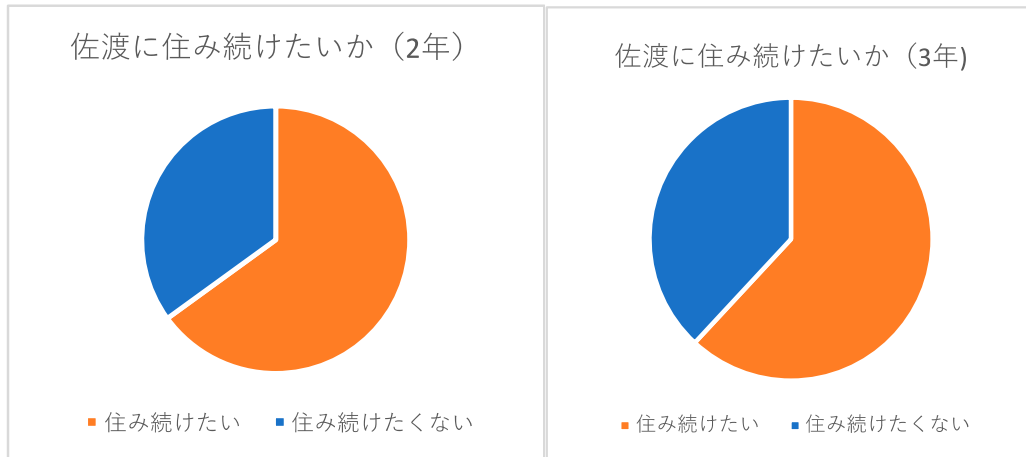


図 13 佐渡に住み続ける希望 (2年次)

図 14 佐渡に住み続ける希望 (3年次)

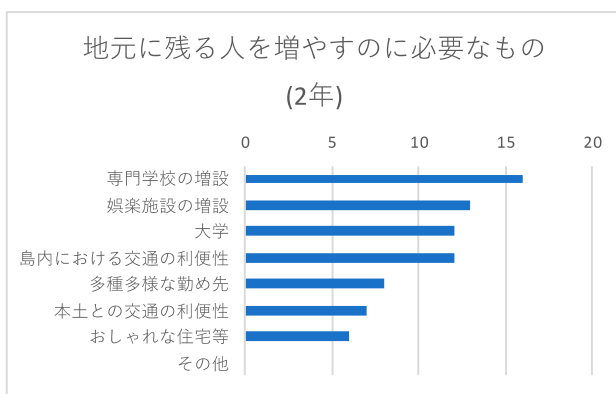


図 15 地元に残る人を増やす方策 (2年次)

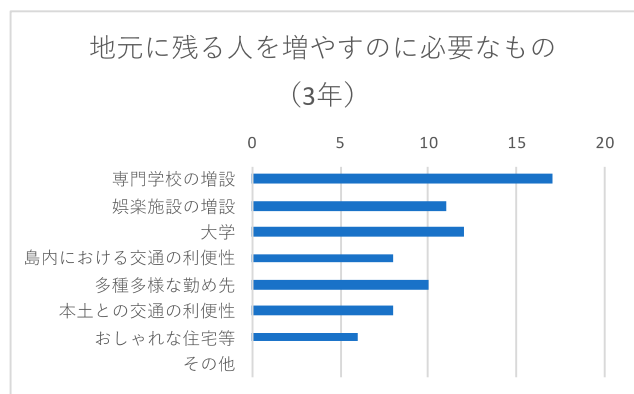


図 16 地元に残る人を増やす方策 (3年次)

### 3-4 佐渡市高校生アンケート結果との比較

佐渡市が実施した 343 名の回答が得られた高校生アンケート結果と藤田晴啓ゼミナールが 2022 年に実施したアンケート調査の比較を行った。佐渡市アンケートでは 84.6%の学生が島外に進学・就職する結果であった一方、佐渡総合高校 3 年生 21 名のアンケートでは 88.9%の学生が島外に進学・就職する結果となり、ほぼ数値的には近い結果となった。佐渡市の高校生アンケートは進学と就職を区別していないので、詳しい情報は不明である。また、島外に進学した後の就職希望も佐渡市アンケートでは質問していないので、最終的な就職希望地(島内あるいは島外)がみえてこない。佐渡総合高校 3 年生 21 名が佐渡に住み続ける(島外進学・就職のあと)希望は 72.2%であった。

一方佐渡市の高校生アンケート調査では「未定だがいずれ佐渡に戻ってきたい」を含めると 66.5%が佐渡定住を希望しており、若干数値が低くなっている。

住みやすさについては、佐渡市の調査と藤田晴啓ゼミナールの質問の方法は異なるものの、佐渡市の個々の項目に対する満足度調査では、「満足」および「やや満足」のポイントを合計した満足度が一番高かったものは「自然環境・エコエネルギー」であり、次に「防災・防犯」であった。この結果は、藤田晴啓ゼミナール調査での「住みやすい要因」として「緑や水辺など自然・町のイメージ」の選択が最も多く、次に「治安」と選択された結果と一致する。藤田ゼミナール調査で 3 番目に多かった「近所づきあい」は、行政サービスに含まれないので佐渡市の調査では質問項目として含まれていなかったが、地域コミュニティーで重要な「近所づきあい」も地域計画としては非常に重要と考える。

佐渡市が実施した高校生アンケートでは自由記述形式で行政サービス等に意見を回収しており、その中で最も意見として多かった項目は 31%の生徒があげた「公共交通」であった。佐渡市公式 Web ページには「公共交通の不便さ」とは記載されていないが、意見ということなので多分に「公共交通の不便さ」に関する意見と推測される。佐渡総合高校でのアンケートでも「住みにくい原因」として「通勤通学の利便性」について「バスや公共交通機関の充実度」が指摘されており、この点も一致した。

#### 4 佐渡市実施高校生ワークショップのレビュー

佐渡市は 2021 年 2 月 22 日から 26 日にかけて市内の高校に通う 2 年生等のべ 67 名に対し 4 回のワークショップを実施し、その結果を公表している。ここではそのレビューを実施した。この一連のワークショップでは「将来にわたって魅力的で、住み続けたい佐渡にするには？」というテーマとして高校生から自由な意見を収集した<sup>8)</sup>。

「佐渡の魅力とは」について大きく分けて、「自然環境」、「生活環境」、「子育て医療福祉」、「教育仕事」、「食」、「観光文化」の 6 項目があげられ、それぞれの強み・弱みに関する意見が出された。「自然環境」としての強みは、「自然が豊かで美しい」、「きれいな海と山が近く、自然に触れる機会が多い」という意見がでた。「生活環境」としての強みは、「家族や友人がいる」、「地域に優しい人やおもしろい人が多い」、「地域内や近所とのつながりが強い」、「生まれ育ったところなので、慣れている」、「静かでのんびりしている」といった意見があがった。一方、弱みとしては「交通」、「買い物」、「娯楽」について多くの意見がだされた。

「教育仕事」に関する弱みとして、「大学や専門学校が少なく、学べる分野が限られる」、「希望する職種、魅力的な企業が少ない」という意見があげられた。「食」の強みは、「食べ物が新鮮でおいしい(米、果物、牛肉、魚介、酒、水など)」があげられた。「観光文化」の強みとして、「歴史的な建造物が多く、独自の歴史や文化を間近に感じられる」、「祭りや伝統文化が大切にされている」、「トキなどの佐渡固有の生き物が多くいる」という意見があがった。

これらのことを踏まえて「住み続けたい佐渡にするには」を考えたところ、「観光地や海岸を清掃やポイ捨て防止を行い、きれいにする」、「島内を移動しやすくする(バスの本数、料金の見直し、電子決済化、タクシー利便性向上など)」、「島外へ移動しやすくする(佐渡汽船の航路、本数、運賃の見直し、橋、トンネルの建設)」、「商業施設を作る(飲食、ショッピングモール、アパレル、スポーツショップ、コンビニなど)」、「若者向けの娯楽施設を作る(映画館、スポーツ施設など)」、「若い人向けのイベントをアンケート等で探し、開催する」、「農業関係など学校の種類を増やす」などがあがった。

最後に「将来の島づくりに向けて、私ができること」で、「SNS 等で佐渡に関することが発信する」、「もっと佐渡を知って、島外の友人等に佐渡の魅力を PR する」という情報発信や、将来は「佐渡で働く」、「就職後に佐渡の発展に貢献する」などがあげられた。

#### 5 佐渡総合高校 2・3 年生とのワークショップ結果

2022 年 9 月 16 日、新潟県立佐渡総合高校ビジネス情報系列 3 年生 20 名および 2 年生 6 名の佐渡定住ワークショップの結果を以下に報告する。

ワークショップでは「佐渡で生活を送る中で実際に感じた不便な点や改善してほしい点」をあげ、「なぜ 10 歳代の若者が佐渡から流出しているのかその原因」を考察し、「佐渡に住んでいてよ

かったと感じる点」や「他の地域にはない魅力」をあげ、それらを活かした「10歳代定住に繋がる解決策のアイデア」を話し合うという流れで行った。

2年生とのワークショップでは「10歳代が楽しめる施設や店舗が少ない」という意見が多くみられ、最新の映画や娯楽施設を体験するためにはフェリーで新潟までいかなければならず、10歳代には金銭的な負担が大きいという指摘があった。

3年生とのワークショップでは、高校卒業後の進路が決まっている参加者が多く、自身の進路選択を踏まえた積極的な意見交換やさまざまな考察がみられた。2年生とは異なる特徴的な傾向として、「大学や専門学校などの高校卒業後の進路先が少ない」という意見が多くみられた。3年生のなかには佐渡島外への進路を決定した生徒が多く参加しており、「自身が島外へ転出する」ことを抱えながら「地域の魅力や若者定住策について考える」ということが難しかったと考えられる。そのため島外か島内かの進路先によってワークショップの内容を変更する必要があった。

「今のまま10歳代流出が続いていくと地域がどうなるか」説明した場面では、2年生と3年生の両方で、集中して説明に耳を傾ける参加者が多く見られた。「このまま流出が続くと地域にどのような影響を及ぼすのか」具体的に説明したことで、今の佐渡の現状を大きな問題として認識させる大きな効果があったと考えられる。

ワークショップの大きなテーマは「10歳代流出の原因について考察を行い、地域の魅力を通じた解決策のアイデアを探し出す」ことであった。高校生の意見から「佐渡での10歳代定住において何が求められているのか」について全体像をつかむことができた。1つ目は「快適な生活を送る上で欠かせない公共交通機関の充実」である。2つ目は「進学先や就職先といった将来に関わる魅力的な進路先の充実」である。3つ目は「最新の流行や娯楽・趣味を満たせる場所や機会の充実」である。これら3つを全て充足させることで、10歳代流出に歯止めをかけることができるのではないかと推察する。

ワークショップ当日まで内容の変更が続いたこともあり、各グループのファシリテーターに細かな進行方法が伝わっていなかったことが大きな反省点としてあげられる。その結果、グループによって進行の円滑性に差が見受けられた。この反省を活かし、ファシリテーターと進行役がテーマの内容を詳細まで理解し、参加者が簡単に理解できるような説明を行えるよう準備する必要がある。

## 6 佐渡市主催および藤田晴啓ゼミナール主催ワークショップの比較

高校生を対象としたこのふたつのワークショップの一番の大きな相違点は課題の設定である。佐渡市主催のワークショップでは「将来にわたって魅力的で、住み続けたい佐渡にするには？」という、比較的ソフトなテーマを設定していたが、最初の「佐渡の魅力」といったワークショップに不慣れな生徒にも意見がだしやすい工夫がなされていた。しかし問題提議に関してはあまり明確な課題が提示されず、場当たりの個別意見が集まったような、全体としてのまとまりがない結果となったところは否定できない。一方、藤田晴啓ゼミナール主催のワークショップは最初から「10歳代若者の佐渡から流出の原因とその解決策」といったかなり現実的な課題設定としたため、場当たりの提案や意見は少ない傾向にあった。「公共交通機関の充実」「進学・就職先の充実」「娯楽施設の充実」の3点が現状の問題点の解決策として提言される結果が得られた。



写真3 小泊集落でのワークショップ-1



写真4 小泊集落でのワークショップ-2

## 7 羽茂小泊での佐渡住民とのワークショップ結果

2022年9月17日に佐渡市羽茂小泊集落にて島内若手在住者とのワークショップを実施した。以下のその結果を報告する。

佐渡在住者を対象としたワークショップはAグループとBグループの2つの日本人グループおよび外国人が参加したCグループ3グループに分かれて実施した。

AグループとBグループ共に構成はファシリテーターおよびタイムキーパーを担当する学生3名に、地域おこし協力隊や地元出身の高校教諭などの島内在住者が参加し、Cグループではファシリテーターおよびタイムキーパーを担当する学生4名に、ワールドユナイテッドジャパン所属の外国の方6名が参加した。

どのグループも前半は若い家族や結婚を考えている20~30代のカップルをターゲットに据えて、「子育てしやすい佐渡の環境整備」、さらに「子育てをする上で大変だったこと」、「あれば便利な行政サービス」を話しあった。また、学生は「将来結婚や子育てをする上で不安なこと」、「定住に必要な施設およびサービス」について話しあった。

A・Bグループ共に、話し合いは地域の人々の意見を引き出すことに重点を置き、ファシリテーターは地域の人に積極的に質問をしたり、でた意見を掘りさげて話題をつくったり、地域の人々の意見をポストイットにまとめるなどして、座談会のような雰囲気で行った。Cグループでは、外国の方との言語の違いから生じるコミュニケーションを意識しながら進めた。

Aグループの「子育て環境整備」について、佐渡の住民の意見では「医療サービスの充実」、「移動手段を増やす」ことがあげられた。また、子育てをする上で大変だったことや便利だと思うサービスは、「子どもの競争力がなく励みがない」、「金銭面で苦勞する」、「子どもの医療費および給食費の無償化」、「保育園で温かいご飯を食べさせたい」があげられた。学生側の意見で「将来結婚や子育てをする上で不安なこと」や「どんな施設やサービスがあればよいか」については、「お金がかかりそう」、「子どもが外で遊べる公園などの場所があるか」、「子どもを預ける場所があるか」、「ご近所付き合いが大変そう」という心配が挙げられた。また、進行の反省点として、テーマが広く意見が出しづらい内容であったのと、別々のテーマを一緒に考えていたので話がまとまりにくかった点があげられる。グループワークを始める前の事前説明がしっかりとなされ、学生側と佐渡住民双方に事前に内容を伝えたほうが、より改善されたと考えられる。

Bグループの「子育て環境整備」への意見では、「ユニークな学校が欲しい」というものがあげ

られた。また、「子育てをする上で大変だったこと」や「便利だと思うサービス」は、「学校の送迎」、「登下校時の見守り」、「給料は低いが物価は高い」、「相談できる友達」、「家事代行サービス」、「返済不要奨学金」があげられた。学生側の意見で、「将来結婚や子育てをする上で不安なこと」や「どんな施設やサービスがあればよいか」について「近くに学校が欲しい」、「子育て支援制度」、「職場があるか不安」、「生活費が不安」ということがあげられた。また、進行上の問題として、参加者から「ターゲットが限定的すぎる」という意見があがった。若い家族や結婚を考えている20～30代のカップルをターゲットにするのではなく、20～30代の若者をターゲットに考えることで、より具体的な解決策を考えたり、移住してくるビジョンが浮かんだりすることが期待できる。今後のワークショップでは、ターゲットを絞り込み、全体でワークショップの内容を事前に共有する必要がある。

Cグループの「子育て環境整備」では、「子育て支援が少ない」、「職場が少ない」、「学校が少ない」、「交通の便が悪い」、「娯楽施設が少ない」という意見があげられた。また、佐渡だけでなく国全体として、税金が多く取られることも原因の一つではないかという意見もあった。一番の原因は、「子育て支援が充実していないこと」であるという意見にまとまった。これに対し、解決策として、外国の参加者からは「先生と保護者と生徒の距離が近い学校を目指す」、「1つ1つの学校の質をよくする」、「学童を充実させる」、「安全な食料の確保」、「就業機会を拡大させる」、「出会いの場(婚活など)を増やす」、「オペア制度を普及させる」という意見が挙げられた。一方、大学生からは「子供を預けるために保育所を充実させる」、「子育て用のグッズのレンタルサービスを設立する」、「経済的な支援を充実させる」、「オンライン診療を充実させる」、「学費の援助を充実させる」、「デリバリーサービスを充実させる」、「ひとり親家庭への支援を充実させる」などの意見があげられた。

進行の反省点として、大学生側が外国の参加者と英語でコミュニケーションを取ることが難しかったり、出された意見のポストイットを英語や日本語に訳す作業に時間がかかったりと、スムーズに進めることができなかった。今後のワークショップでは、大学生が英語でコミュニケーションを取れるように事前準備し、外国の方が参加してもスムーズに行えるようにする必要があると考える。

3つのグループで共通していたこととして、施設やサービスでは「返済不要奨学金」、「子供の医療費の無償化、給食費の無償化」、「子育て支援」などの経済面に関する意見が課題としてあがっていた。学生側の意見では「生活費が不安」、「お金がかかりそう」といった経済面に対する不安があがっており、これらのサービスを充実することが重要であると考えることができた。そして、「家事代行サービス」、「デリバリーサービス」「子供を預ける場所」といったサービスを充実させることが定住に繋がるといった意見がどのグループからも挙がっており、経済面からもつながってくる施設の密接な関係が考えられる。

グループごとの相違点としては、Aグループ佐渡住民の意見では医療や食事に関するサービスに対する意見があがった。進行の反省点としては、別々のテーマを一緒に考えていたことや、学生側と佐渡在住の方双方に事前説明を行うことがあげられた。

Bグループでの佐渡住民の意見では、「ユニークな学校が欲しい」という意見から始まり、学校の送迎、登下校時の見守りといった教育に関する意見が多くあがった。反省点としては、テーマのターゲット層が限定的であったことから、ターゲット層の見直しがあげられた。

Cグループでは外国の参加者の意見もあったことから、日本にあまり普及していない「オペア制度」といった外国ならではのサービスや、他のグループでは出なかった「出会いの場(婚活など)を増やす」といった意見が挙げられた。反省点では英語と日本語のコミュニケーションの難しさから生じる問題点があげられた。

## 8 考察

### 8-1 ふたつのワークショップ成果の相違点

佐渡総合高校でのワークショップでは、「10歳代流出の原因について考察を行い、地域の魅力を通じた解決策のアイデアを探し出す」をテーマに話し合いを進めた。高校生からの「佐渡での10歳代定住において何が求められているのか」について、「快適な生活を送る上で欠かせない公共交通機関の充実」、「進学先や就職先といった将来に関わる魅力的な進路先の充実」、「最新の流行や娯楽・趣味を満たせる場所や機会の充実」の3つを充足させることで、10歳代流出に歯止めをかけることができるのではないかと推察することができた。

一方、小泊集落でのワークショップでは、「佐渡での住みやすい環境整備」をテーマに話し合いを進めた。3つのグループで共通して出た意見として、「移動手段の充実」、「子育て支援の充実」、「学校の増設」、「給料に合った物価」などが挙げられた。小泊集落でのワークショップ参加者の中には、実際に佐渡での子育ての経験がある方もいたため、過去に子育てをして何が不便だったか、どんな制度があったら良かったか、というような意見が積極的に挙げられた。また、外国人グループも参加したため、「オペア制度の普及」、外国は人と人との距離感が近いことから、「先生と保護者の距離を縮める」といった、日本人からはあがらないような意見も聞くことができた。

藤田晴啓ゼミナールは二つのワークショップを運営したことで、これからの将来を島内で過ごすかどうか考える若者、既に島内で生活をしていてどうすればより良い生活が送れるかを考える親世代の方の両方からそれぞれの視点に合わせた意見を聞くことができ、今後の活動の指針とすることができた。

### 8-2 今後活かせること

今回の二日間にわたり開催されたワークショップでは、佐渡総合高校生徒と佐渡在住者、海外ボランティアに参加していただいた。参加者全員に共通して、ワークショップの説明を真剣に聞く場面や、グループワーク内で積極的に意見を出し合い議論する場面が多くみられた。しかし、準備不足によって海外ボランティア団体(外国人)との英語コミュニケーションが十分にできなかったため、英会話力の改善が必要と考える。このワークショップは佐渡における若者流出の現状を再認識し、この現状に対して問題意識を持ってもらうためのきっかけとなったと考えられる。

2022年のワークショップを活かして2023年以降はより若者定住のための具体的な方策について考える、あるいは現状の認識を広めるようなワークショップに取り組む必要がある。今後は、佐渡定住ワークショップによる定住化に関わる要因と意識の共有をはかり、学生との交流を介して得られる地元アイデンティティを強化することが大事だと考える。30~40歳代世代と高校生が合同で、大学生のファシリテーションによるワークショップを行うことができれば、異なる世代間での佐渡定住に関する意見や考えの相違あるいは共通性を認識できる。さらに、高校生に伝えたいアドバイス等を直に伝えることができるとともに、高校生の考えや意見も聞く機会が得られると考える。

## 9 おわりに

佐渡市の若者流出は、「日本で一番大きな離島である佐渡島特有の現象」と捉えられがちであるが、離島だけの問題ではないと考える。単に「島内交通網や教育機関の整備」だけでは解決しない「人口減少の根本的な問題」が解決できないと、現在佐渡で起きていることは、新潟市にも同様の問題となって再現される。報道によると、2022年の新潟県内市町村で転出が転入を超える転出超過は新潟市の754人と県内トップであった。2位は長岡市の737人。人口減による政令都市廃止にともなう、行政サービスの縮小とそれにとともなう新潟市経済の落ち込み。多くの若者が新潟を離れる日がそう遠くない、佐渡と同じことが新潟市および長岡市で繰り返されかねない。ただ、佐渡は人口減少が何十年か早く訪れているだけにすぎないとも考えられる。

## 謝辞

2012年から毎年欠かさず学生を中心とした交流を続けられているのも、佐渡市羽茂小泊集落の役員、住民のみなさまのご支援・ご協力のおかげである。特に「小泊活性化友の会」代表岡崎一也さんには毎年大変お世話になっている。ここに謝意を表したい。

新潟県立佐渡総合高校には生徒とのワークショップの許可およびご協力をいただき大変お世話になった。同高校の協力がなかったら前年から続いて追跡調査およびワークショップは実現しなかったのも、ワークショップに参加いただいた生徒も含め謝意を表したい。

併せて小泊におけるワークショップにご参加いただいた地域おこし協力隊、兼業農家、公務に携わっておられる方々、ワールドユナイテッドジャパンの外国の方6名にこの場をお借りして感謝したい。

「令和4年度域学連携地域づくり応援事業」による佐渡市からの助成をいただいた。学生の宿泊費・交通費が支出でき負担軽減につながったことに深く感謝する。

最後に2022年9月の藤田晴啓ゼミナールメンバーとして佐渡調査に参加し、ワークショップのファシリテーターとして働いたり、グループごとの報告書を作成いただいたが、著者リストには掲載していない桐生修也、杉山昂生、鈴木梨央、関川颯太、渡邊壮大、渡邊なつの各氏に謝意を表す。

## 参考文献

- 1) 藤田晴啓 岡崎一也 能舞台活用・伝統芸能による地域活性化に関する調査研究-II 集落活性化調査研究 -能・農イベント持続的発展のための協働と情報拡散- 新潟国際情報大学経営情報学部紀要 Vol.4 (2021) 140-150
- 2) 藤田晴啓 尾仲峻頌 他 佐渡の高校生および若手在住者に対する定住に関するワークショップと意識調査報告 - SDGs 定住プログラムと情報拡散 - 新潟国際情報大学経営情報学部紀要 Vol.5 (2022) 72-81
- 3) 佐渡市総合計画に関するアンケート調査・ワークショップの結果 <https://www.city.sado.niigata.jp/site/plan/26004.html>
- 4) 佐渡市総合計画に関する市民アンケート調査結果 <https://www.city.sado.niigata.jp/uploaded/attachment/23479.pdf>
- 5) 佐渡市総合計画に関する子育て世代アンケート調査結果



<https://www.city.sado.niigata.jp/uploaded/attachment/23480.pdf>

6) 佐渡市総合計画に関する子育て世代アンケート（再調査）調査結果

<https://www.city.sado.niigata.jp/uploaded/attachment/26650.pdf>

7) 佐渡市総合計画に関する高校生アンケート調査結果

<https://www.city.sado.niigata.jp/uploaded/attachment/23481.pdf>

8) 佐渡市総合計画に関する高校生ワークショップ結果

<https://www.city.sado.niigata.jp/uploaded/attachment/23258.pdf>